

日本語複合名詞の語構成の内と外

李保忠

『図説日本語』（昭和五十七年）の品詞（1）のところに、『日本国語大辞典』の見出し語四十三万八千三百五十七語について調査したデータがある。それによると、名詞の占める割合が一番多くて、品詞全体の七三・一九パーセントもあるということである。この夥しい語数をもっている名詞の中で、複合語の割合がどれだけ占めているかに関しては、今のところ、これという文献と詳しい統計がまだないようであるが、きっと相当な数があると思う。この数多い複合名詞は、それぞれどんな法則にそって構成され、またその外形と内部とはどんなつながりがあるのだろうかなど、日本語複合名詞の語構成の問題に関心をもって、それについて初歩的な考察をしてみた。

考察は、まず日本語の語彙、造語法、語構成などについての資料や文献などを読んで、まとめることにした。それからまとめた内容を分類して分析し、外部構造から内部構造への手順で考察した。以下、考察した結果をまとめながら考えていくことにする。

第一節 外部構造から見た構成パターン

複合名詞を外形から見ると、その構成は大体つぎの三つの様式があげられる。

一、語構成単位による分類

『図説日本語』の〔語構成〕（1）の説明によると、構成単位数による複次結合語の結合語分類は、つぎのようになっている。

三単位語	七二〇	(47.8パーセント)
四単位語	五二五	(34.9パーセント)
五単位語	一五二	(10.1パーセント)
六単位語	六六	(4.4パーセント)
七単位語	二八	(1.9パーセント)
八単位語	一三	(0.9パーセント)

上のデータは、新聞用語の用語調査の約九分の一の量のデータに基づいた調査で、中に一つの単語として定着していない「臨時一語」であるものが多いようである。ところが、私たちは一般常識として、国語辞書の見出し語になっているようなものを、日本語の単位だと思っているから、複合名詞の構成単位を考察するとき、できるだけ国語辞書的な短い単語に視点をおくことにした。こういう複合名詞の構成単位は、主につぎの二種類である。

(1) 二単位のもの

日本語複合名詞の大部分は、二つの単位が一回結合してできるものである。例えば：

川——風　山——道　再——検討　甘——納豆　有名——人
接着——剤　飲み——物　居住——地　都市——公害　国会——議員など。

(2) 三単位のもの

この種の複合名詞は、右にあげた二単位語のもの比べて、語数がめっきり少なくなる。その実例としては、

乳——飲み——子　蚊——取り——線香　恩——知ら——ず　湯——沸し——器　値——さげ——まち　目——覚し——時計などがあげられる。

もちろん、ねた——きり——老人や国際——電話——交換——室などのような、四つ以上の単位からなる語も少なくないが、それを臨時一語としたほうがいいと思って、ここでふれないことにした。

二、語種による分類

複合名詞を語種別に分けてみると、つぎの四種に分類することができる。

(1) 漢語名詞

現代語の中で、漢語名詞の語数は圧倒的に多いことは、『図説日本語』語種(1)のところを参考にみればわかると思う。その語例としてはつぎのようなものがある

読——書　握——手　消——火　海——水　男——女　上——京
地下——水　熱帯——植物　など

(2) 和語名詞

秋——空(あきぞら)　家——出(いえで)　味——付け(あじつけ)
手——編み(てあみ)　姿——見(すがたみ)　運——試し(うんだめし)
渡り——鳥(わたりどり)など

(3) 外来語名詞

ベース・アップ　ロープ・ウェー　バス・ルーム　アンダー・グラウンド
ローヤル・ゼリー　モビ・レージ　ビーチ・コート　リモート・コントロール
シェビング・クリーム　オペレーション・センターなど。

(4) 混種語名詞

チフス・菌　アルコール・中毒　後・スカート　皮・ジャンパー
学力・テスト　電気・スタンド　生・ワクチン　純生・ビールなど。

三、構成パターンによる分類

複合名詞の成分とその構成パターンについて、西尾寅弥氏は、参考文献(3)所収の論文「造語法と略語法」の中で、次のようにまとめている。

複合名詞の成分になるものに、どんな品詞性のものがあるかと言えば、第一に「背番号」の「背」「番号」のような名詞がある。大部分の名詞は(だいたい)そのままの形で複合名詞の成分になり得る可能性をもっている。第二に「郵便受け」「あずかり」のような「うけ」「あずかり」のような動詞連用形があげられる。第三に「長電話」「ドル安」の「なが」「やす」のような形容詞の語幹と同じ形があげられる。この外にも、「きれいごと」「あいまい宿」のような形容動詞の語幹も、成分になることがある。また「うっかり者」「ちょっと見」「ごく細」「ただ働き」「ひそひそ話」「のろのろ運転」のように、副詞が上位成分になることがある。

西尾寅弥氏の説によれば、複合名詞の成分になるもので、品詞性を決定しうる主なものは以上の程度であるが、名詞、動詞連用形、形容詞語幹の三類は、複合名詞の上位成分にも下位成分にもなりえて、特に主要な要素と考えられる。また、この三要素のうち、どれかがどれかと結びつく形式、すなわち、二つの要素が一回結合して出来る形式としては、九種類が考えられるわけである。そして、この九種類のすべてに実例が存在する。

西尾氏の説に基づいて、その構成パターンをつぎのように示すことができる。

(1) 名・名

春——風 右——手 山——道 奥——歯 酒——樽 砂
 ——浜 秋——空 粉——雪 本——棚 人工——芝 ガラ
 ス——窓 籐——椅子 条件——反射 飛行機——雲
 手——足 草——木 天——地 善——悪 男——女 左
 ——右 党利——党略 竜頭——蛇尾

(2) 形・名

丸——顔 うす——味 厚——シャツ 近——道 若——者
 すこ——腕 悪——智慧 うれし——涙 甘——納豆 高——げた
 有名——人 愚か——者 温暖——前線 必要——条件

(3) 動・名

渡り——鳥 焼き——のり 回り——舞台 飲み——物 曲り——
 角 考え——こと 入学——金 空き——瓶 送り——状 流れ
 ——作業 合成——肥料 救援——投手

(4) 名・動

雨——あがり 日——暮れ 種——まき ねじ——回し 寺——参
 り 昼——寝 雪——どけ 栓——抜き 早期——発見 年内
 ——解散 内政——干涉 地震——予知
 海外——公演 水力——発電

(5) 形・動

厚——切り 早——起き うれし——泣き 黒——光り おそ——
 咲き 深——追い 特別——参加 完全——消毒

(6) 動・動

(a) 立ち——読み 見——習い 食い——逃げ 泣き——別れ
建て——売り 徐行——運転 徹底——観測

(b) 伸び——縮み 貸し——借り 乗り——降り 行き——来
読み——書き はやり——すたり 出し——入れ 暴飲——暴食
善戦——健闘 比較——対照

(7) 名・形

腹——痛 品——薄 身——重 手——近 色——白 円——高
胴——長 栄養——豊富 素行——不良

(8) 形・形

(a) 遠——浅

(b) 白——黒 高——低 甘——辛 すき——きらい 的確——
平明

(9) 動・形

切れ——長 待ち——遠 話——べた 望み——薄 実現——可能

上の九種には、実例があるとはいっても、その実例の数の上では、それらの間には大きな開きがある。西尾氏の調べたところでは、上下の両成分とも名詞であるものは、他を圧倒して多数の例がある。最後の三形式、すなわち、形容詞語幹を後の成分とするもの、特に(8)と(9)は非常に例が少なく、結合形式というよりも、それに該当する実例をкаろうじて見出しうるといふ程度である。

(1)、(6)、(8)の三形式、すなわち同種の成分の結合形式については、前と後の成分が対等に並列する関係のものもある。西尾氏はこれを、(b)の類としてあげた。前が後を限定し、後の成分が全体を代表する、一般に多く見られる関係のものは、(a)の類としてあげた。他の六形式については特に区別しなかったが、それをみな(a)と同じ類とした。

また、複合語の構成パターンについて、野村雅昭氏が「造語法」という論文の中でも言及したことがある。野村氏は、それをつぎの六類十五種に分類した。

〔第一類〕

(1) (A) + (B) …… A がBの状態である。

色——白 身——軽 物価——高 栄養——豊富

(2) (C) + (B) …… C することがBの状態である。

話——下手 待——遠 望み——薄

(3) (A) + (C) …… A が(を、に、でと……) Cする。

雨——上がり バター——いため 動脈——硬化 地盤——沈下
街頭——募金

〔第二類〕

(4) (B) + (C) …… B の状態で Cする。

早——起き 嬉し——泣き 薄——着

(5) (C) + (C) ……C した状態で Cする。

見—習い 立ち—読み 乱—反射

(6) (D) + (C) ……D の状態で Cする。

ほろ—よい にわか—造り 再—検討 最—優先 一時—
停止 一斉—捜査 突然—変異

〔第三類〕

(7) (B) + (A) ……B の状態であるA

丸—顔 若—者 高—げたアケル有名—人 怪—文書

(8) (C) + (A) ……C する(した。している)A

打ち—傷 渡り—鳥 空き—瓶 睡眠—薬

〔第四類〕

(9) (A) + (A)

山—道 本—箱 晩—飯 奥—歯 会社—員 動物
—園 電気—スタンド 政治—危機 大衆—演芸

〔第五類〕

(10) (A)・(A)

朝—晩 足—腰 善—悪 党利—党略 竜頭—蛇尾

(11) (B)・(B)

あま—から すき—きらい 不要—不急 自由—自在

(12) (C)・(C)

売り—買い 読み—書き はやり—すたり 出し—入れ

〔第六類〕

(13) (A) = (A)

ひと—びと すみ—ずみ ところ—どころ

(14) (B) = (B)

なが—なが はや—ばや くら—ぐろ

15) (C) = (C)

とび—とび 思い—思い ちり—ちり

野村雅昭氏の説明したところによると、右のうち、もっとも生産性の高いのは〔第四類〕(名詞+名詞)である。〔第一類〕—〔第三類〕がそれにつづき、〔第五類〕と〔第六類〕は少ない。〔第六類〕は名詞性という点で問題があるが、野村氏に便宜上それをここにふくめた。

西尾、野村両氏の複合名詞の構成パターンについての調査は、それぞれ独特なものがある上に、似ている点もあると言える。しかし、野村氏のまとめた六類十五形式より西尾氏の九形式のほうが簡明で、代表的であるから、それを取りあげようがよいと思う。第一、野村氏のあげた〔第六類〕に、ちょっと問題がある複合名詞ときめにくい点がある。それに、〔第五類〕の(10)と(12)は、それぞれ〔第四類〕の(9)と〔第二類〕の(2)とダブっているから、一緒にまとめ

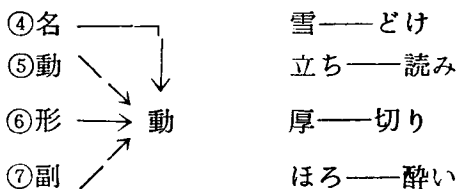
たほうが良いと思う。また、西尾氏のまとめた三要素九形式に、さらに副詞を一要素として加え、「副詞+動詞」という形式を入れて、四要素+形式にしたほうが当だと思う。

複合名詞の構成パターンについての西尾、野村両氏の考察した結果を分析すると、つぎのようなことがわかる。つまり、複合名詞の主な構成要素は、名詞、詞連用形、形容詞語幹の三つにあることである。この三つの要素は、それぞれ自由に転換して、上部成分にも下部成分にもなることができる。その構成パターンはまたつぎのように示すことができる。

(1) 名詞が後部語基となる場合



(2) 動詞が後部語基となる場合



(3) 形容詞が後部語基となる場合



上の十種の構成パターンのうち、(2)の⑦を除いて、他の九種はみな、名、動形の三要素の交互結合によってできるものである。

以上の考察から、現代語の複合名詞のつくられ方の主な構成パターンは、ほぼきていると思われる。ここにまとめたのは、前にもふれたように、語基と語基の次的な結合関係のみであり、語構成という観点からは、接辞をふくめた二次以上結合関係や、漢語複合語基の内部の結合関係についても考察する必要があるがふれるいとまがなかった。ただし、以上のようなパターン分類で、ほぼ説明するとはできると思う。

複合名詞の外部構造について、以上のように考えてきたが、その内部構造はどんなになっているだろうか。

第二節 内部構造から見た文法関係

複合名詞の語構成をさらに一步深く考察すると、その語と語の間は厳密な文法則にそって、規則正しく結合されていることに気がつく。文法の機能から見て、本語の名詞は、膠着成分の助詞、助動詞(部分的)の接着作用を借りて、文の

語、述語、修飾語、補語などの成分となることができる。形容詞と動詞から転じた名詞は、形では名詞となるが、その大多数が依然として用言としての特性をもっている。したがって、新しい複合名詞を形成する場合、その深層にもとの語の主述関係、並列関係、補充関係などが依然として存在している。それを考察した結果は、以下のとおりである。

(1) 主述関係にあるもの

この種のものは、文法と意味構造の上、「……が……の状態である」と「……が……する」のニュアンスが含まれている。例えば：

色——白（色が白いこと（物・人））　　雪——どけ（雪がとけること）
貿易不振（貿易が不振であること）　　前途洋洋（前途が洋々としていること）
意気消沈（意志が消沈すること）など。

(2) 並列関係にあるもの

これは、主にその複合語の前半と後半の関係が、対等になっているものを指す。こういう複合形式には、また同義並列と対義並列とに分けることができる。例えば：

(A) 同義並列

あちら——こちら　　自由——自在アケル誠心——誠意　　栄枯——盛衰
美辞——麗句　　兄弟——姉妹　　清廉——潔白　　党利——党略

(B) 対義並列

天——地　　朝——晩　　手——足　　上——下　　父——母　　高——低
男尊——女卑　　好き——嫌い　　勝ち——負け　　薄利——多売　　な
ど。

(3) 修飾関係にあるもの

修飾関係のものは、さらに連体修飾と連用修飾とに分けられる。

(A) 連体修飾関係

①名詞十(の)十名詞」の修飾関係

例えば：

山——道　　石——橋　　泥——人形　　秋——日和　　区——役所　　肉
——料理　　国会——議員　　貿易——収支　　など。

②「形容詞^いな名詞」の修飾関係

例えば：

丸——顔（丸い顔）　　甘——酒（甘い酒）　　有名——人（有名な人）
必要——条件（必要な条件）　　など。

③「動詞連体形+名詞」の修飾関係

例えば：

落ち——葉（落ちた葉のこと）　　焼け——跡（焼けた跡のこと）　　移動
——カメラ（移動する（デキル）カメラ）　　合成——肥料（合成する（シ

タ)肥料のこと)

この種の複合語は、その内部構造に「……スル」「……シテイル」「……シタ」+名詞の構成方式が存在している。

(B)連用修飾関係

①形容詞が動詞を修飾する場合

例えば:

早——起き(早く起キルコト) むだ——使い(ムダニ使ウコト)

②副詞が動詞を修飾する場合

例えば:

ちょっと——見(チット見ること) 一斉——捜査(一斉に捜査すること)

③動詞連用形が動詞を修飾する場合

例えば:

見——習い(見て習うこと) 飢——死(飢えて死ぬこと)

(4)補充関係にあるもの

こういう形式の複合名詞は、主に深層構造に、接着剤としての助詞の働きが存在するものである。これらの助詞は、主として、格助詞の「を」「に」「と」「で」「から」「より」などである。

①名詞+(を)+動詞

格助詞「を」は、ここで動作の目的をあらわす。例えば:

物——置き(物を置くところ) 種——蒔き(種をまくこと) 茶——
入れ(茶を入れるもの) 封——切り(封を切ること) 汚れ——落し
(汚れを落すこと) 子供だまし(子供を騙すこと(もの)) 人員
——整理(人員を整理すること) ポンド——切り下げ(ポンドをきりさげ
ること)

②名詞+(で)+動詞

この格助詞「で」は、方法、手段の意味をあらわす。例えば:

手——編み(手で編むこと) 一人——決め(一人で決めること) 写
真——判定(写真で判定すること) バター——いため(バターでいためる
こと)など。

③名詞+(に)+動詞

この格助詞「に」は、動作、作用の帰着点を表す。例えば:

木——のぼり(木に登ること(ひと)) 会社——勤め(会社につとめる
こと) 経営——参加(経営に参加すること) 親——孝行(親に孝行す
ること) など。

④名詞+(と)+動詞

この格助詞「と」は、動作の相手を示す。例えば:

記者——会見(記者と会見すること) 人——づきあい(人とつきあうこ
と) など。

⑤名詞＋（から）＋動詞

この格助詞「から」は、動作の起点を表す。例えば：

親——ゆずり（親からゆずられること）　あちら——帰り（あちら＝外国から帰ること）　など。

⑥名詞＋（へ）＋動詞

この格助詞「へ」は、方向、方角を表す「へ」である。例えば：

里——帰り（里へ帰ること）　東京——ゆき（東京へ行くこと）　など。

⑦名詞＋（より）＋動詞

この「より」は、比較の対象を表す。例えば：

男——まさり（男よりまさること）　など。

以上、複合名詞の内部構造について、文法関係から、おおざっぱにまとめてみた。このまとめからもわかるように、日本語複合名詞の語構成は、十分に日本語文法の特徴を表わしているのである。

日本語複合名詞の構成は、普通、主語、修飾語と客語が前に来て、修飾される部分と用言が後に来るという、日本語の語順と文法法則に厳密にそうものである。以上の考察から、複合名詞の中に、動詞連用形を後部語基とする語が、きわめて多いことがわかる。

第三節 深層構造の複雑化

以上に述べたように、複合名詞の大部分は、その構成パターンと意味構造がわりあい単純で、外部構造と内部構造とは、意味上一致していることが多いから、ちょっと分析してみれば、その構成関係と意味が大体わかると思う。ところが、一部分の複合名詞は、その深層構造にある文法関係はわりあい複雑で、外形だけでは、なかなか分らないのである。特につぎの数種の複合名詞に対しては、注意する必要があると思う。

一、地名、場所を表す名詞と他の名詞とが複合する場合、その深層構造に「□」が——で（に）——するその□」という意味構造が、含まれている。例えば：

山——ゆり　海——がめ　高山——蝶　宇宙——塵　地下——水

熱帯——植物　などの類のものは、その構成と文法関係をざっと見れば、簡単のように見えて、山ゆりを「やまのゆり」、海がめを「海のかめ」、高山蝶を「高山の蝶」宇宙塵を「宇宙の塵」、地下水を「地下の水」、「熱帯植物」を「熱帯の植物」と解釈しやすくなる。もちろんそういうふうに解釈してもいいが、正解だとは言えない。なぜかと言えば、格助詞「の」は、主に連体修飾語をつくって、複合語の上部語基と下部語基を所有、所属、あるいは所有され、所属される関係として示す役割をするのである。しかし「山ゆり」などの上下語基の関係は、実際は格助詞「の」だけでは、なかなか説明しきれないところがある。これらの複合を解釈し説明する場合、その語源、あるいはその深層構造にひそんでいる意味を考察する必要はある。例えば、「山ゆり」の実際の意味は「山に生えているゆり」のこと

で、「高山蝶」は「高山にいる蝶」のことである。このような例が、まだ沢山ある。例えば：

「海がめ」（海に棲むかめ） 「川風」（川で起るその風） 「宇宙塵」（宇宙に散在している微粒状物質） 「地下水」（地中の土砂、岩石などのすきまや割れ目に溜ってる水） 「熱帯植物」（熱帯に生えている植物） など。

右にあげた例のような場合、もう単に「の」で説明することができなくて、もっと深くその深層にある意味をさぐってみる必要がある。またたとえば、「宇宙服」と「雪上車」を簡単に「宇宙の服」、「雪上の車」と解釈したら、その意味が分からなくなって誤解が起ることがある。

日本語には、こういう深層構造の複雑な複合語があるから、もし予備知識がなければ、それに騙されることがあると思う。

二、動詞連用形と地点、場所を表す語とが複合するとき、その深層構造に「が——するその□」の意味が含まれている。

例えば、隠れ家、遊び場、飛行甲板などがこの類のものである。もしも、こういうような複合名詞を、それぞれ「隠れている家」、「遊んでいる場所」、「飛行する甲板」と解釈したら大間違いで、人に笑われると思う。これらの複合語の実際の意味は、つぎのとおりである。

「隠れ家」（誰かが隠れて住むその家）。

「遊び場」（人が遊ぶために使うその場所） 「飛行甲板」（飛行機が離陸したり、着陸したりするときに使う甲板）

右の例からも分るように、こういう複合語の解釈について、もう格助詞だけで説明できなくなって、長いセンテスで説明しなければ間にあわない、ということである。

三、動詞連用形と物を現す名詞とが複合するとき、その深層構造に「□が……を使って……をするその□」の意味がある。

例えば、「消しゴム」は「消すゴム」の意味ではなくて、「ゴムを使って何かを消すゴム」「ほしぎお」は「干している竿」の意味ではなくて、「竿を使って洗濯物を干す竿」の意味である。この種の複合語は、まだたくさんある。例えば：

割り箸（使うとき、それを割って二本とする割れ目のついた箸）

釣り針（魚を釣るために、つり糸の先につける針）。 撮み物（酒類を飲むとき、つまんで食べる簡単なおかず）

留め金（つなぎがはなれないように、とめておく金具） 贈り物（人に贈るために使うその物）

飛び込み台（とびこみ競技に使う台） など。

四、一部の名詞が動詞連用形と複合する時、その深層構造に長い文節と何らかの背景といわれがある。例えば：

「雨やどり」は「雨でやどること」ではなくて、「雨がやむまで軒下や木かげなどにやすむこと」である。

「花冷え」は「花で冷えること」ではなくて、「桜の咲くころ寒さが来ること」である。

「油照り」は「油に照ること」ではなくて、「夏、うす曇りで風がなく、日がじりじりと照ってひどくむしあついこと」である。

「毛彫り」は「毛を彫ること」ではなくて、毛などのような細い線に模様、文字などを彫ること。

「蝶結び」は「蝶を結ぶこと」ではなく、ひも、リボン、ネクタイなどの結び方で、蝶の形に似せて結ぶもの。

「川どめ」は「川を止めること」ではなくて、川の水が増えて危険な場合に川を渡ることを禁止すること。

「うぐいす張り」は「うぐいすをはること」ではなくて、踏むとうぐいすの鳴き声に似た音を出すように、廊下の板を張ることの意味である。

右にあげた複合語は、一般の文法関係では、なかなか解釈できないものばかりで、日本語を習う外国人にとっては、とくにむずかしいと思う。それらの語を文字だけみて、自分の理解したままに解釈したら、間違いが起りやすいから、慎重を期して辞書などを調べておいたほうがいい。このような複合語は、みかけの構造と基底の構造の違いが問題になっているから、私たちはそれを覚えるときには、その外形にだまされないように、その基底にある意味を真剣に考える必要がある。

以上は、複合名詞の語構成について、外形から深層まで、初歩的な考察を試みたものだが、中にはあやまりや不十分なところが、きつとあると思う。ここで、諸先生方のご教示を心からお願いする次第である。

最後に、小稿の完成にあたって、いろいろと熱心に指導して下つた香川大学教授の土屋信一先生に厚く御礼を申し上げる。

参考文献：

- (1) 林 大 「図説日本語」(一九八二年)
- (2) 阪倉篤義「語構成の研究」(一九六五年)
- (3) 鈴木孝夫「日本語の語彙と表現」(一九七六年)
- (4) 田中章夫「日本語語彙論」(一九七八年)
- (5) 野村雅昭「造語法」(岩波講座日本語9)(一九七七年)
- (6) 金田一京助「新選国語辞典」(一九八六年)

一九八六年六月二十日